

# 人権ほっと28年9月号

「いじめは絶対になくすことができません！」

大阪教育大学特任教授

島善信

「：今回の授業で大きく気持ちが変わったことがあります。この世界からいじめはなくすことができるということです。この授業を受ける前は、いじめはなくならないと思っていたけど、絶対になくすことはできません！そのためにも私たちが努力して1人でもいじめで苦しんでいる人を救いたいです。」これは、筆者が授業でいじめ問題を取り上げた際、当時を振り返って泣きながら話してくれた仲間の話聞いた学生の文章です。

小・中学校時代に・いじめにかかわったことのある学生の多いことに毎年驚かされます。そしてその体験が、被害者であった学生には辛く苦しかった深い心の傷として、また、加害者や傍観者であった学生にも思い出したくない暗い記憶として、今なお影を落としていきます。小・中学校時

代に、目の前で起きているいじめに向き合い解決した経験のある学生は、残念ながらほとんどいません。逆に、いじめの状況を何も変えることができなかつた無力感を、多くの学生が抱えています。「どうせなくならない」というあきらめの意識が根強いのです。

「話を聞いたときは胸がとてもしめつけられた。自分が今まで見たり聞いたりした中で一番ひどかった。：いじめがなくなればいいじゃない。て、なくさなければならぬ。」

「いじめられた時の辛い気持ちを少しでも消すことができるとか不安でいっぱいだったと思います。皆の前で話をしてくれた人の勇気は本当にすごいなと感じました。」

被害者からの生の声は、「あきらめ」を変えます。いじめをなくしたい、なくせるといふ自覚、被害者に寄り添うやさしさなど、学生に芽生えた変化に、「子どもを変えるのは子ども」と、改めてかみしめています。